

議員研修報告書

報告者 （会派等） 未来

1. 研修期間	令和6年8月6日（火）
2. 研修場所	北海道余市町役場
3. 研修テーマ	市議会が長年求め続けている、自治体の憲法「自治基本条例」制定に対し、田中市長は令和4年度においてようやく制定を約束したが、第九次総合計画の策定時期にあたることから九次総策定後に検討を持ち越している。 北海道余市町は、新町長の策定提案のもと、主幹的部分を住民が担い、住民の手で条例を作り上げた。 議員全員で構成する高山市の自治基本条例策定に対する特別委員会の構成員として、策定における手法を参考とすべく学び、それを通じて改めて自治基本条例の本質を研修する。
4. 研修項目	余市町自治基本条例の制定について
5. 概要	※別添付資料参照 【質問事項と回答説明】 Q1. 自治基本条例策定の際、最も大切だと考えたこと A. まちづくりの主人公は町民であるということ 「地方自治の憲法である“自治基本条例”を制定し、町民が主人公であるまちを明文化します。」 Q2. 町民の理解度向上における課題と取り組みは A. 町内での普及啓発が消極的で、担当以外の職員の大半は理解が希薄だった。そのなかで、町民の理解度向上に向けた働きかけも質・量ともに不十分だった。 Q3. 住民主体で策定に向かった背景、プロセス、課題は A. 地方分権一括法の施行に伴う自治体の自主性強化を背景に、住民主体の条例制定は時流に乗ったものだった。計38回の準備会、策定委員会での活発な議論をもとに素案が作成された制定プロセスは大変意義深いと認識しているが、結果的に「条例制定」がゴールとなってしまった。 Q4. 策定委員会の雰囲気、議論の進み方は。住民意思が反映

	されたと考える部分は A. 委員の一人ひとりが思いの丈を発言していた。それを基に事務局がたたき台を作成し、さらに議論が交わされ素案が完成した。住民(委員)の意見が最大限反映された条例。 Q5. 策定の取り組みでまちが変わったと感じられる部分は A. 特に変化はない。条例制定がゴールになってしまい、その後の取り組みも不十分になっている。 Q6. 策定直後にコロナ蔓延が始まったが、条例推進にあたって不都合が生じたことは A. 「余市町民自治推進委員会」を书面開催せざるを得ないなどあり、普及への取り組みがますます停滞した。 Q7. 策定後の課題と解消への取り組みは A. 行政の意思決定のスピード低下が懸念される。(事例は実際には発生していない)
6. 考察・感想	余市町において自治基本条例が住民主体の策定委員会によって策定されたことの意義は極めて大きく、重い。余市町自治基本条例の附則にある「誰かがまちをつくるのではなく、私たち一人一人が自覚と責任を持ち、知恵を出し合い、お互いに支え合い、地域への関わりを持ち、より豊かな、より安全な、より過ごしやすいまちを目指し、行動することが必要です。 町民、議会及び町のそれぞれの役割や関係が明らかになるように、私たち一人一人の行動を手助けできるよう、まちづくりの基本となるこの条例を定めます。」。 地方自治の在り方はこの宣言に尽きると断言しても過言ではないと学んだ。 余市町においては、町が事務局に徹底し、行政側の意向を余談事として差し挟まなかったことが大きな実を結ぶこととなった。委員会の構成が自治体の関係団体代表を主たるメンバーとすることは発想において硬直化をもたらし、自由な意見の発言の妨げとなることがしばしばあり、同調圧力の中で、革新性、開放性、未来性の欠如という結果になりかねない。 条例の形骸化を防ぐためにも、この点においての配慮の重要性を学んだ。

議員研修報告書

報告者 （会派等） 未来

1. 研修期間	令和6年8月7日（水）
2. 研修場所	北海道札幌市図書館・情報館
3. 研修テーマ	図書館は社会変化状況に合わせた発展、変化を察知した対応が求められている。その中で札幌市図書館は、「札幌市民交流プラザ」内に情報環境の変化をとらえた「札幌図書館・情報館」を設置した。図書館の機能進化とともに、高山市の駅西に建設予定の複合施設に設置予定である図書館の分館の形なども併せ視察研修を行う
4. 研修項目	札幌市図書館・情報館の設置目的、機能、役割、効果について
5. 概要	※別添付資料参照 ○まちなかの複合交流施設「札幌市民交流プラザ」内に設置 ○ビジネスパーソンに寄り添う、まちの情報拠点(機能特化) ○本を貸し出さない図書館 ○誰もが落ち着ける空間づくり ○人に寄り添う本棚づくり ○リーチカウンターは、司書の「レファレンス」と「出張相談窓口」で専門家をつなぐ、ビジネス支援のゲートウェイ ○最新の情報は“人の頭の中”にある ○ダウンロードできない価値 ○エンペデッドライブラリーがつくる未来
6. 考察・感想	「本は人なり」というが、いろいろな「ひと」が語りかけてくる本棚であってほしい。 そして、図書館の中で交流が深まる仕掛け、新たな工夫をこらす必要がある。視察先の図書・情報館においては、立ち寄りやすいようカウンターを施設の中心に据えている。また、館内での会話も自由とし、「図書館ではお静かに」という常識からも距離が置かれている。結果、レファレンスや相談窓口はもとより、グループでの調べものや図書館資料を利用しながらのビジネスパーソンや若い女性のグループなど、これまで多くは見かけなかったような多様な利用者が来館している。 「本の世界にまた戻って来ました」「泊まれませんか?」「やる気の出る空間ですね」などさまざまなうれしい声が図書・情報館に届いているそうである。

	高山市も図書館の運営において、おおいに参考にすべきである。図書館観のアップデートを行えるのは、図書館サービスの担い手である図書館員である。図書館員の新しい発想に基づく「型破り」への果敢な挑戦を期待したい。
--	---